ー役員エッセイー

大通公園を望む窓辺から

有床診療所

常任理事　林　　宏一

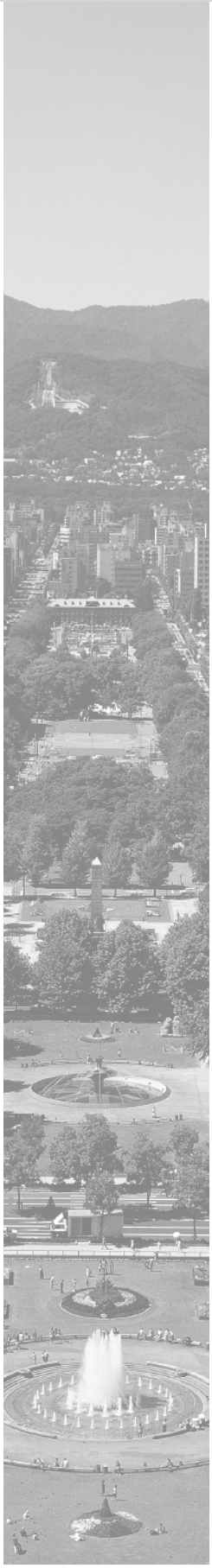
福岡県、安部整形外科での火災事故のいたましい報告は、有床診療所を経営している私自身にとって、決して人ごとのようには思えなかった。院長先生の憔悴しきった会見ニュースを見ていて、本当に自分がその場に立たされているごとき錯覚さえも感じた。

巷間、有床診療所へのスプリンクラー設置義務化は確実視され、その費用に対して国庫補助がされるか否かまだ現時点では不明である。有床診療所とはいえレントゲン室や手術室、厨房およびリハビリ室など面積も広く、ましてや小規模病院がスケールダウンして有床診療所として運営している所は、たぶん使用していない元病室や上層階の住宅部分にもスプリンクラー設置を命ぜられると思われる。３階以上になると水道圧のみのスプリンクラーではなく、貯水槽や揚水ポンプの設置も考えなければならない。仮に補助があったにしても、かなりの出費は覚悟しなければならない。

ああー、管理栄養士の件だけでも胸が苦しいのに、スプリンクラーで頭も痛い。

ところで、厚生労働省はやや食傷気味であるが、盛んに「地域包括ケアシステム構築」を叫んでいる。超少子高齢時代で、その主旨は理解できるが、かかりつけ医として容易に確実に24時間連絡が取れる施設は有床診療所しかない。さらに母体保護法指定要件もある。これが絶滅危惧種の状況で、想像を絶する早さで消滅してしまったら、その構想も机上の空論となり、殊に北海道においては火を見るより明らかである。現在までのわが国の医療に有床診療所は多大な貢献をしてきた。これを、無床診療所と病院だけにして良いとはとても思われない。医療政策的に国に一考を切にお願いしたい。

妻は私の日常診療を見て、一刻も早く無床化したらと言っている。私自身本心はかなり揺らいでいる。今回の管理栄養士雇用問題はもちろん、従業員対応や後継者問題、もしものことを考えるとその揺らぎは一層強くなっている。



新犬（真剣）教育

理事　堀　　修司

以前「この欄」に「老老犬介護」の題で駄文を書かせてもらった。あの犬は平成24年12月22日午前３時に20歳で私の腕の中で息を引き取った。白い柩に入れて白い花を添えた。私が死んでもしないような悲しみ方をしていた妻が「焼き場に行きます」と言った。１番好きだった孫と３人で焼き上がった小さな白い骨を拾った。生前に画家に描いてもらった肖像画と骨壷と花を特等席に置いた。「犬、どう？」「死んじゃった」。涙腺が緩む。私は仕事と酒で紛らわせるが、妻が心配だった。

２月10日「今日が四十九日だね」。その日に妻は新しい犬を連れてきた。片手に乗る700ｇ黒褐色のヨークシャーテリアだ。名前も「ミール（ロシア語で平和）」と決めていた。「ペットロス症候群にならない１番の方法は、新しい犬に愛情を注ぐこと」。生後２ヵ月に満たない「ミール」の教育のために、食事・排泄・噛み癖直しの新しい教育書も読んだ。エサはドッグフードには悪い成分も入っていると言われ、炊いたご飯に生肉ミンチを混ぜ、トマトやにんじん、きゅうりをすりおろして朝夕とあげていた。

１ヵ月で1,500ｇになり、耳がピンと立って、毛色も変わってきた。黒褐色から茶褐色と変り、今ではグレー系になっている。「歩く宝石箱と言われております」とのペットショップの従業員の言葉に妻は納得がいかない。「黒褐色がよかったのに…」。散歩していると「何才ですか？ジーサン顔ですね」と言われたそうである。

３ヵ月目から自宅に１週間に一度「ドッグトレーナー」を呼んで教育をしてもらった。トレーナーの前では「こんなミール君見たことがない！」と言うほど「お利口」だそうであるが、私には変化が分からない。「甘やかし」は良くない。前の犬と比べてしまう自分がいる。前の犬は看取ったけれど、今度は「ミール」君が看取る番だ。心配で私が長生きしそうである。